

令和5年度 全国学力・学習状況調査の結果報告

横浜市立根岸中学校

1 はじめに

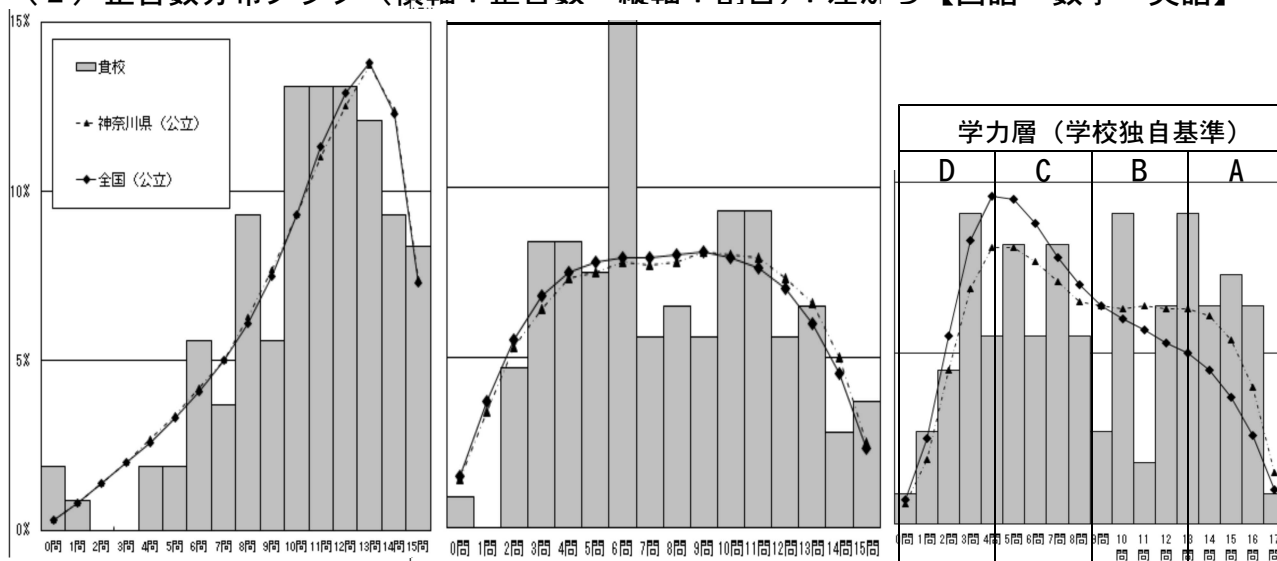
4月18日に実施された標記調査の集計結果（英語「話すこと」調査を除く）が届きましたので、全国および神奈川県全体の集計結果と比較しながら①全体概況と、昨年度と同様にS-P表を用いて②各教科の成果と課題を洗い出し、③考察を加えてみました。（文責：教務主任 山田 浩一）

2 全体概況

(1) 教科別概況：遅刻や早退があったため、教科により受験者数が異なります。

【国 語】	生徒数	平均正答数	平均正答率(%)	中央値
横浜市立根岸中学校	107	10.5 / 15	70	11.0
神奈川県（公立）	60,261	10.4 / 15	70	11.0
全国（公立）	892,738	10.5 / 15	69.8	11.0
【数 学】	生徒数	平均正答数	平均正答率(%)	中央値
横浜市立根岸中学校	107	7.8 / 15	52	7.0
神奈川県（公立）	60,302	7.8 / 15	52	8.0
全国（公立）	893,114	7.6 / 15	51.0	8.0
【英 語】	生徒数	平均正答数	平均正答率(%)	中央値
横浜市立根岸中学校	110	8.8 / 17	52	9.0
神奈川県（公立）	60,318	8.6 / 17	50	8.0
全国（公立）	893,528	7.7 / 17	45.6	7.0

(2) 正答数分布グラフ（横軸：正答数 縦軸：割合）：左から【国語・数学・英語】



(1)(2)の概況を見る限り、正答数を比較すると全国とほぼ同じような傾向にある。英語においては全国の集計値（—●—）より学力層A（学校独自基準）の生徒の割合が高くなっていることがわかる。

3 各教科の成果（正答率の高かった設問）：太字網掛けの設問について考察します。

(1) 国語

	問題番号	問題の概要	正答率	全国
国語	2一	「落胆する」の意味として適切なものを選択する	86.9	91.1
	1一	インタビューの前に準備したメモについて説明したものとして適切なものを選択する	86.0	87.5
	1四	インタビューのまとめとしてどのようなことを述べるのか、自分の考えを書く	86.9	82.5
	1三	相手の話を受けて発した質問について、述べ方の工夫とその意図を説明したものとして適切なものを選択する	85.0	76.6

設問1では、総合的な学習の時間等において「社会で働く上で大切なこと」について考えるために、インタビューをする場面が設定されている。目的に応じて集めた情報（インターネットの記事）を基に知りたいことを前もって整理し（メモ）、相手の話を捉えて効果的に質問したり、聞き取ったことを基に自分の考えをまとめたりすることは、前年度までに「自分の考えを正確に伝えるのに必要な根拠を明確にするため、必要な情報を資料から引用して書くことができるようになるための指導や活動が十分に行われ、生徒にとっては身近に感じられる場面設定だったようである。

(2) 数学

	問題番号	問題の概要	正答率	全国
数学	6(1)	はじめの数が11のとき、はじめの数にける数が2、たす数が3のときの計算結果を求める	91.6	88.9
	2	$12 \left(\frac{x}{4} + \frac{y}{6} \right)$ を計算する	85.0	80.5
	8(2)	二人の選手のグラフが直線で表されていること的前提となっている事柄を選ぶ	68.2	61.7

設問8では、日常生活でも馴染みのある駅伝大会において、新緑大学の選手が晴天大学の選手に追いつく地点を予想する場面が取り上げられている。設問8(2)ではこの場面において、大悟さんがまとめた表を基につくったグラフを直線で表し、二人の選手についてどのように考えたことになるかを捉える設問になっている。日常生活や社会の事象を考察する場面では、事象を理想化したり単純化したりして、その特徴を的確に捉え、事象を数学的に解釈することが求められる場合がある。その際、問題解決の方法を考え、それを数学的に説明することが大切である。

大悟さんがまとめた表

地点	スタート地点からの道のり	晴天大学	新緑大学
スタート地点	0 m	0 秒	100 秒
図書館前	1200 m	238 秒	316 秒
郵便局前	2800 m	567 秒	611 秒
駅前	4000 m	798 秒	824 秒

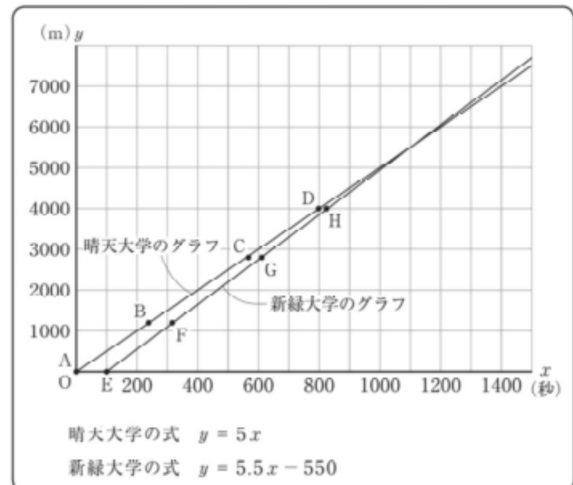
晴天大学のグラフと新緑大学のグラフがそれぞれ直線で表されていることは、二人の選手について、一定であると考えたことになります。

それぞれの走る速さが一定である

と考えたんだ



コンピュータを使って表された直線のグラフと式



(3) 英語

	問題番号	問題の概要	正答率	全国
英語	1(1)	ある状況を描写する英語を聞き、その内容を最も適切に表している絵を選択する	79.1	79.0
	5(2)	事実や考えが書かれた英文を読み、考えを表している英文を選択する	68.2	64.5
	5(1)	ある状況を描写する英文を読み、その内容を最も適切に表しているグラフを選択する	68.2	56.0

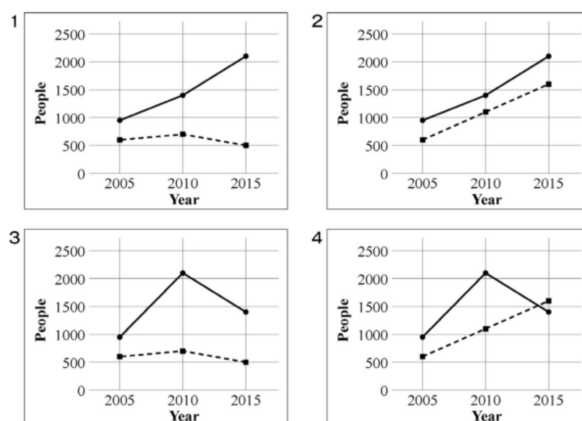
設問5は、ある市における海外からの観光客と海外に行く観光客の人数の推移を描写する英文から、情報を正確に読み取ることができるかどうかを把握するために出題されている。情報を正確に読み取るためには、音声や語彙、表現、文法や言語の働き等を理解するとともに、これらの知識を（ここでは英文を読むことによる）実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けておくことが重要である。

また、事実と考えを区別して読解することも情報を正確に読み取る上で重要な技能の一つである。

④ Everyone should bring their garbage back home.

この正解文中のshouldは助動詞で、書き手が自分の考え（～すべきである）を付け加えるときに用いる語である。このことから日頃から知識・技能の習得のみで終わらず、思考・判断力を発揮して表現につなげる学習が浸透していることがわかる。

— : Tourists from abroad to Minami City
 - - - : Tourists from Minami City to other countries



4 各教科の課題（正答率の低かった設問）

(1) 国語

	問題番号	問題の概要	正答率	全国
国語	4一	歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す（いひける）	60.7	82.5
	4三	現代語で書かれた「竹取物語」のどこがどのように工夫されているかについて、古典と比較して書く	47.7	50.0
	3二	漢字を書く（おし量って）※推しメンの推し、「推量」は推し量ること	27.1	43.9

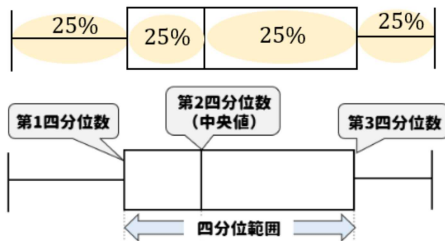
問題番号	問題の概要	解答類型				
		1	2	3	99	無解答
4三	現代語で書かれた「竹取物語」のどこがどのように工夫されているかについて、古典と比較して書く	47.7	7.5	21.5	4.7	18.7
		51.2	6.6	16.8	5.5	19.8
		50.0	7.5	16.4	5.4	20.7
正答の条件		1	条件①、②を満たして解答しているもの			◎
①「竹取物語」の一部の表現を引用している		2	条件①を満たし、条件②を満たさないで解答しているもの			
②それをどう工夫しているかを記述している		3	条件②を満たし、条件①を満たさないで解答しているもの			
		99	上記以外の解答			
		0	無解答			

設問4一の歴史的仮名遣い「いひける」や3二「推し量って」については知識・技能の範疇である。設問4三は思考・判断・表現の観点で、「よろづのこと」を「笠、竿、箆、籠、筆、箱、筒、箸。」というように具体的に書いて、翁が竹でどのようなものを作っていたのかが分かるようにしていたり、「手なれた仕事だ。」と付け加えることで、竹を割る翁の様子を読者が想像できるようにしているなど、作家星新一が工夫した具体例を挙げる必要がある。このように読み手に配慮した表現の工夫は自分の考えをより効果的に伝える手段として、ぜひ身につけさせたい能力である。

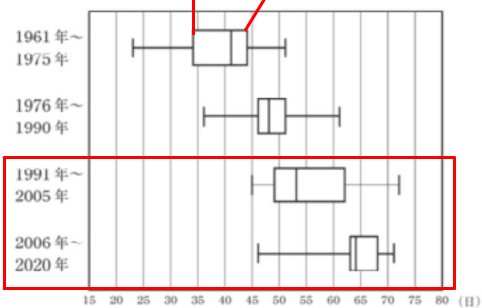
(2) 数学

	問題番号	問題の概要	正答率	全国
数学	7(1)	1961年～1975年の四分位範囲を求める	48.6	65.7
	9(2)	二等辺三角形でない2つの合同な三角形のときに平行線がかけないことについて、二等辺三角形のときの証明の中から成り立たなくなる式を書く	36.4	37.0
	3	空間における平面が1つに決まる場合について、正しい記述を選ぶ	34.6	30.4

7(2) 1991年～2005年の黄葉日は1991年～2005年の黄葉日より遅くなっている傾向にある」と主張することができる理由を、箱ひげ図の箱に着目して説明する



	経過日数(日)				
	最小値	第1四分位数	中央値	第3四分位数	最大値
1961年～1975年	23	34	41	44	51
1976年～1990年	36	46	48	51	61
1991年～2005年	45	49	53	62	72
2006年～2020年	46	63	64	68	71



設問7の「箱ひげ図」は、もともと高等学校での履修内容が中学校に下りてきたもので、中2の最後に学習する。データの散らばりを視覚的に表すもので、最小値から最大値までの範囲内のデータを4等分して「ひげ」と「箱」で表している。

(1)では「四分位範囲を求めよ」だから、表の $44-34=10$ で求めればよい。

一花さん「4つの箱ひげ図を見ると、黄葉日はだんだん遅くなっている傾向がありそうだね。」

啓太さん「でも、1991年～2005年と2006年～2020年の箱ひげ図は、右端と左端が同じくらいの位置にあるよ。遅くなっているといえるのかな。」

一化さん「確かに箱ひげ図の右端と左端についてはそうだけど、箱に着目すれば、2006年～2020年の黄葉日は、1991年～2005年の黄葉日より遅くなっている傾向にあるといえるのではないかな。」

また(2)では、(赤)枠内の2つの箱について1991～2005年の箱をA、2006～2020年の箱をBとすると、

- ①AよりもBの方が右側にあること
- ②Aの第1四分位数よりBの第1四分位数が右にあり、かつ、Aの第3四分位数よりBの第3四分位数が右にあること
- ③Aの第3四分位数よりBの第1四分位数が右にあること

のいずれかと、結論の「2006年～2020年の黄葉日は1991年～2005年の黄葉日より遅くなっている傾向にある。」ことを併せて記述できれば完答となる。「箱ひげ図」に関する確かな理解とともに、複数の集団のデータの分布の傾向を比較して、ときには批判的に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明する能力を高めることが数学の究極の目標ではないだろうか。

(3) 英語

	問題番号	問題の概要	正答率	全国
英語	9(1)	与えられた英語を適切な形に変えたり、不足している語を補ったりして、会話が成り立つように英文を完成させる	30.9	20.9
	8(2)	ロボットについて書かれた英文を読み、書き手の意見に対する自分の考えとその理由を書く	21.8	19.5
	10	学校生活(行事や部活動など)の中から紹介したいものを1つ取り上げ、それを説明するまとまりのある文章を書く	13.6	7.4

設問8の本文内で述べられているのは、今日レストランで見かける給仕ロボットや、家庭におけるロボットペットに関する話であり、筆者はこれを肯定的に捉えていることが読み取れる。この設問の主旨は、こうした社会的な話題に関して読んだことについて、自分の考えとその理由を書くことができるかどうかである。賛成か反対かの意思表示は答え方の知識・技能があるかどうかにかかるところが大きい。その理由の説明に関しては、身近な題材とは言え、個々の生徒の経験に左右される部分もあり、回答にこぎ着けるまでに時間を要することもある。次の設問10についても同様のことが言えるのだが、日常生活や社会的な問題の中からさまざまな話題を抽出して、それに関する自分の考えなどを読み手を意識して正確な英語で確実に伝える能力が身につくのは、もう少し先のように思える。

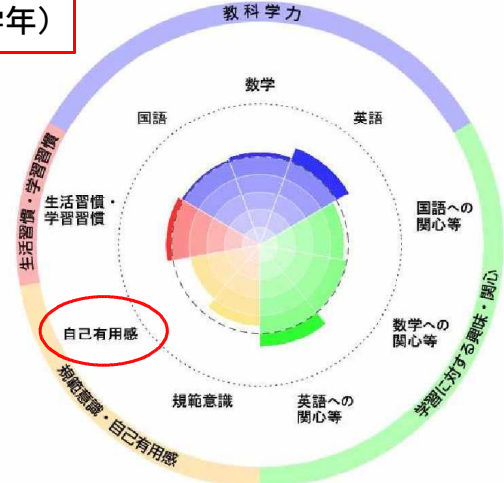
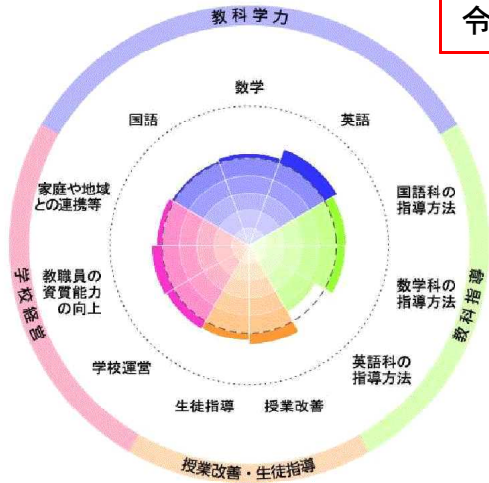
全国学力・学習状況調査結果チャートの推移

以下の集計値／グラフは本校の調査結果の集計の過去3か年分で、その推移を比較検討するものである。

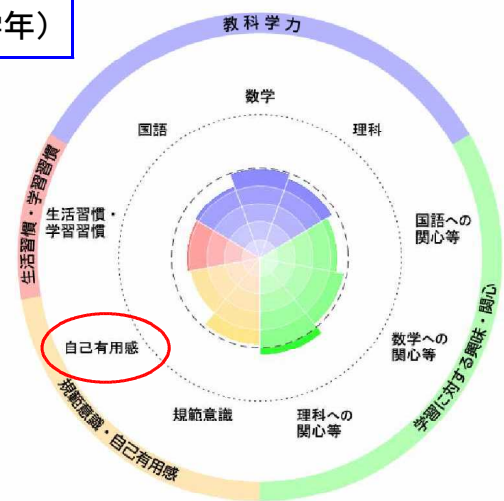
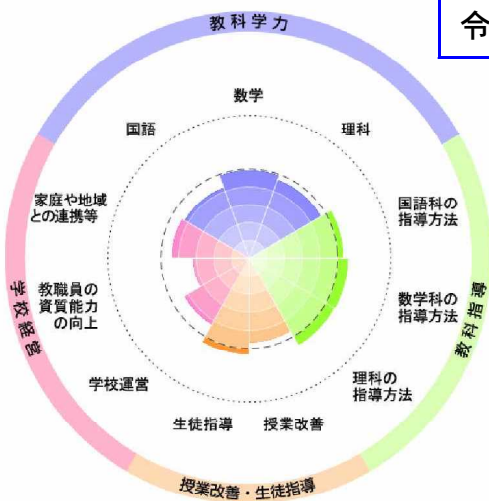
【左：学校運営（学校質問紙）】

【右：生徒（生徒質問紙）】

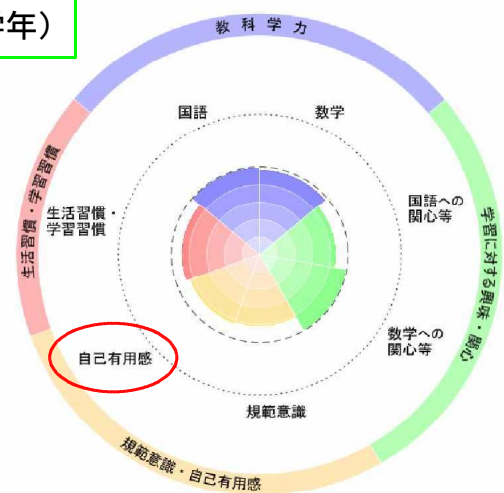
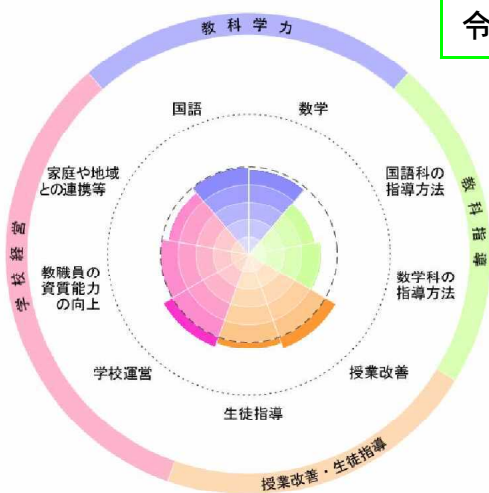
令和5年度（赤学年）



令和4年度（青学年）



令和3年度（緑学年）

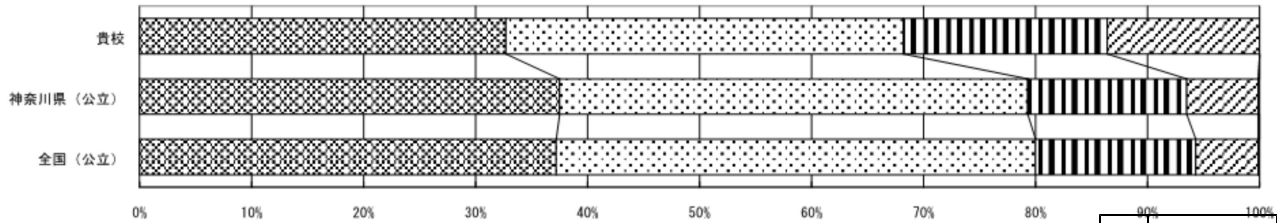


本校生徒の特徴として、「自己有用感」の数値が低いことが挙げられる。該当する質問項目の本年度の回答状況を並べてみると次ページのようになる。

質問番号				
(4)	自分には、よいところがあると思いますか			
選択肢	1	2	3	4
貴校	32.7	35.5	18.2	13.6
神奈川県（公立）	37.5	41.8	14.2	6.4
全国（公立）	37.2	42.8	14.3	5.6

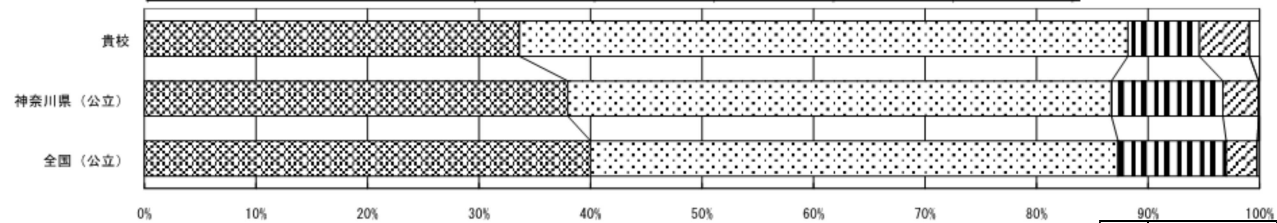
回答者数110名の内訳

1	36
2	39
3	20
4	15



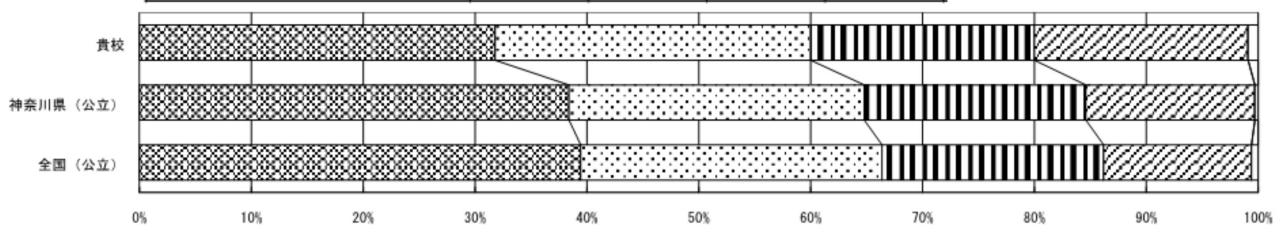
質問番号					
(5)	先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか				
選択肢	1	2	3	4	無回答
貴校	33.6	54.5	6.4	4.5	0.9
神奈川県（公立）	38.0	48.8	10.0	3.2	0.1
全国（公立）	40.0	47.3	9.7	2.8	0.2

1	37
2	60
3	7
4	5
無	1



質問番号					
(7)	将来の夢や目標を持っていますか				
選択肢	1	2	3	4	無回答
貴校	31.8	28.2	20.0	19.1	0.9
神奈川県（公立）	38.4	26.4	19.8	15.1	0.3
全国（公立）	39.4	26.9	19.8	13.2	0.6

1	35
2	31
3	22
4	21
無	1



設問4の「自分のよいところ」は集計上「自己有用感」となっているが、漠然とした尋ね方なので、生徒の回答内にはself-esteem（セルフ・エスティーム）の訳語である「自尊感情・自己肯定感」と、self-efficacy（セルフ・エフィカシー）の訳語である「自己効力感・自己有用感」とが混在している可能性がある。

自分に対して肯定的な評価を抱えている状態を表す「自尊感情」は、本来自分の中で生まれ育つ。大人が褒めることによって高まるものの、実力以上に過大評価してしまったり、周りからの評価を得られずに元に戻ってしまったり、自他の評価のギャップにストレスを感じるようになったり、ということが起こりうる。

もう一方の「自己有用感」は、他人の役に立ったとか、他人に喜んでもらえた等、相手の存在なしには生まれてこない点がポイントで、例を挙げると、



「クラスで一番足が速いのでクラスの代表に選ばれた。みんなの期待に応えられるよう頑張りたい」というように、相手や集団との関係の中で形成される。(出典:「自尊感情」?それとも、「自己有用感」?)

回答3と4を合わせた35名の「そう思わない」生徒たちには何かしらの原因があることには間違いないが、何に(どちらに)起因しているのかは、別に行われる「Y-Pアセスメント」等の調査結果を待ちたい。

設問7に関して、現代が「将来の変化を予測することが困難な時代」であるために、子どもたちが将来の夢や目標を持ちにくい時代であることは現代社会全体の問題と言える。これについては、平成27年(2015年)に発出された中教審の「論点整理」内の記述を引用して解説したい。

予測できない未来に対応するためには、社会の変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、一人一人が自らの可能性を最大限に発揮し、よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出していくことが重要である(主体的に学習に取り組む態度)。

そのためには、

教育を通じて、解き方があらかじめ定まった問題を効率的に解ける力を育む(知識・技能)だけでは不十分である。これからの子供たちには、社会の加速度的な変化の中でも、社会的・職業的に自立した人間として、伝統や文化に立脚し、高い志と意欲を持って、蓄積された知識を礎としながら、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断し、自ら問いを立ててその解決を目指し(思考・判断・表現)、他者と協働しながら新たな価値を生み出していくことが求められる。

波線・括弧書きを追加した

そこで、学校の場においては、

- ①子供たち一人一人の可能性を伸ばし、新しい時代に求められる資質・能力を確実に育成していくことや、
- ②そのために求められる学校の在り方を不断に探究する文化を形成していくことが、より一層重要になる。

と記されている。

これを本校の「学校教育目標」と対比してみると、次のようにこれからの課題が見えてくる。

(根岸中学校は、生徒一人ひとりの個性を大切にしながら、自らの可能性を信じて、たえず成長していこうとする人間の育成を目指します。

|| ||
子供たち一人一人の可能性を伸ばし、新しい時代に求められる資質・能力を確実に育成していく

「将来=予測できない未来」に向けて子どもたちが「夢や目標を持てる」ようにするためには、家庭・学校・地域・社会、あるいは企業等が協働して「新しい時代に求められる資質・能力」とは何かというビジョンを持つこと、そして、様々な場面を捉えて、それらを育成していくことが必要である。それには本校の学びの中でこれと関わりの深い総合的な学習の時間やキャリア(自分づくり)教育をはじめとする様々な教科・領域の中で多面的・多角的に考え、これからの「新しい時代に求められる資質・能力とは何か」ということについて具体化していく必要がある。「たえず成長していこうとする人間」が成長していくには、実現を目指すための「夢や目標」が不可欠だからである。

自己有用感を高めるためのワンポイント・アドバイス



「褒めること」と「認めること」の違いは？

大人の側に見れば、この両者の違いはあつてないようなものでしょう。「認めてあげようと思って、褒めている」「褒めることは、そのまま認めること」という感覚なのではないでしょうか。そして、多くの子供も、そんな感じで受け止めていることでしょう。とりわけ、年齢が低いほど、その差はないに等しいに違いありません。

しかし、「認めてほしい」「認めてもらいたい」と強く思っている子供には、そんな大人の言い分は通じないかも知れません。中には、「褒められてもうれしくない」といった子供も出てきたりするのです。一体、何が違うのでしょうか。

大人が子供を「褒める」ときは、一般に大人の基準や水準で「褒める」ことが多いように思われます。そして、大人の側の基準で一定の水準に達した、水準を超えたと評価するのが「褒める」という行為と言えます。反対に言えば、水準に達しない場合には「頑張りなさい」と叱咤激励することはあつても、褒めることは稀でしょう。

それに対して、子供が「認めてもらいたい」ときというのは、一般に子供の基準や水準で「褒められたい」のではないのでしょうか。子供なりのこだわりで努力したり工夫したりしたことを「認められたい」のです。だから、大人の考えた基準に達していなくとも「褒めてほしい」と考えたり、大人の考えた水準に到達して「褒められた」場合でさえ、大人の基準とは異なる子供の基準でも「褒めてほしい」と考えたりするわけです。

だから、自分がさほど努力もしていない、自分の功績ではないことを、「みなさん、よく頑張りましたね」と全員を一括りにして褒められても、さほどうれしくもなく、励みにもならないのかも知れません。子供の実際の行動と向き合うことなく、表面的にお世辞を言ったり、ちやほやししたりしても、子供の「自己有用感」はおろか、「自尊感情」すら高めない可能性が高いのです。

行事に取り組む、学習に取り組む際などに、子供自身に目標や工夫する点、努力する点などを考えさせておき、その基準に沿ってどこまで達成できたのかを評価することが「認める」という行為では重要になります。それが、「自己有用感」を育むのです。単に良かった・悪かったと評価するだけの「褒める」では、「自尊感情」を育むことはできても、「自己有用感」を育むことにはなりにくいのです。

例えば、「ふりかえりシート」を用いているのであれば、児童生徒の振り返りに対して、ただ「頑張ったね」とだけ書くのではなく、その児童生徒が「こだわった」「見てほしかった」点に触れた記述を返しましょう。そのためにも、一人一人をきちんと見ることが大切です。